

当団体では、これまで男性のDV被害者の支援について、女性被害者支援と同様に実施してきた。電話やメールによる相談から面接相談へと繋ぎ、その方の支援計画をコーディネートし、スタッフが被害者の心情に寄り添いながらの伴走支援をおこなう。シェルターへの緊急一時保護、弁護士事務所や裁判所等への同行支援、医療機関や職場に同行して事情を説明するお手伝いをしたり、ケース終結後にも連絡があれば近況をうかがって必要な情報提供をおこなったりするなど、支援内容としては女性に対するそれと何ら変わりはない。

そのような支援活動のなかで彼らと言葉を交わし、被害の実態を知るにつれ、男性がDV被害を受けるということは現代の日本社会においては決定的な少数者となってしまいう現状に思い至るようになった。また、私たちのように女性被害者と同様の支援をおこなっている機関（公的、民間いずれも）が圧倒的に少ないことで、男性被害者ならではの困難さなどに彼ら自身が直面してきた実態を知り、DV被害者支援の現場において「男女差別」ともいえるものが存在しているのではないかとの懸念が生まれ、男性DV被害者を取り巻く環境について検証するに至った。

「令和5年度徳島県DV被害者セーフティネット強化支援事業」において、男性DV被害者が置かれている被害実態や彼ら自身の思い、支援環境について検証し、現状を明らかにすることを目的としてアンケート調査を実施することとした。

アンケート調査は、これまで当団体が支援または関係した当事者20名を対象に実施した。20名にアンケートを依頼したところ、20名全員が回答してくださった。

アンケートの設問項目等については、委員長である弁護士や白鳥の森の相談員で構成する委員らで検討し、個人の状況や被害実態を聴き取る項目については、被害者が男女どちらの被害者に対しても使用できる文言を心掛けた。設問5（4）～（8）では男性被害者が置かれている状況を聴き取り、設問7（1）～（2）では彼ら自身の言葉で同じ男性被害者に対してのメッセージ、そして社会に向けたメッセージを記入してもらう形式をとった。

アンケート結果に対する詳細な考察は委員長にお任せするとして、私たち検討委員が検証した結果、特に着目した部分を二点記す。

一点目は、被害後のケア不足が明らかになった、という点である。私たちが女性被害者を支援する場合、相談初期は被害状況を聴き取り、本人の意向に沿って支援方針をコーディネートする。そして一時保護したり、代理人を立てるなどして加害者が直接接触してくる危険を取り除く等の対策を講じた後、被害者が(子どもも含めて)安心・安全な環境での生活が落ち着いてきた頃に、女性カウンセラーによるカウンセリングを実施することがある。そのなかで、被害者自身が被害と向き合い、気持ちを整理し、傷つきを修復していく作業をカウンセラーと共にこなっていく。他方、男性被害者の場合、仕事があり日中にカウンセリングを受ける時間を捻出しづらいことなどが主な理由となって、心理的なケアが疎かになっている傾向が顕著に表れていると感じた。初期段階で被害の聴き取りをおこないながら、彼らの思いを受容し、励まし、傷ついた心を修復できるよう心掛けてはいるが、決して十分とはいえない。設問7(2)「社会に向けてメッセージをお願いします」の自由記述欄に、「過去を思い出すだけでも手が震えて字が書けません。」と書いた方が被害を受けていたのは約10年も前のことである。それでも今なお過去の被害を思い出すと苦しくなるため、普段は心の底に仕舞って触れないようにしていると話されていた。他にも、設問3(2)身体的な暴力について「菜箸で刺す」(刺された)と回答した方は、新聞記者の取材を受けて過去の出来事を語った際、思いがけず声が震え言葉が出てこなくなるといったフラッシュバックが起り、自分でも大変驚いたという経験を教えてくださいました。このように、被害からの経過年数や重篤度にかかわらず、被害を受けたことそのものを正しく理解し、必要なケアをおこなう機会を、特に男性被害者は逸してしまっているように思う。

二点目は、ジェンダーバイアスについてである。彼ら自身に「DV被害者は女性である」という思い込みが少なからずあったことは、設問5(1)「誰かに相談しましたか」の問いに「いいえ」と回答し、その理由として「DVと認識していなかった」や「DVの自覚が無かった」との回答があったことからもうかがえる。また、設問5(2)「相談しようと思ってから、すぐに行動に移せましたか」の問いに「いいえ」と回答し、相談できなかった理由に対する「恥ずかしかった」との回答や、設問5(4)「男性が、自分が被害を受けているDVについて相談しにくい現状はありますか」との問いに「世間の目が気になる」、「今の社会

が『暴力＝男が女にするもの』という風潮があるから」との回答からも、現代社会のみならず、男性被害者自身も「暴力の被害者＝女性」という認識があり、そこに当てはまらない男性被害者である自分を「恥ずかしい」「理解してもらえない」と感じていることが明らかになった。もちろん、公的機関の名称、パンフレットや周知活動が女性被害者向けであると受け取られかねない点は見逃せないが、男性が容易に相談機関を利用できない理由には、これまでの人生で無意識に植えつけられてきたジェンダーバイアスが影響していることが明らかになった。この点についても相談体制の充実と並行して取り組むべき課題であると考えられる。

今回、アンケートに回答するだけでも過去の被害を思い出して苦しくなってしまうことは、一見辛いだけの経験と捉えてしまいかねないが、これまでケアができていなかっただけで、適切なケアをおこなって回復することは十分可能であるとの「気づき」であるともいえるし、彼ら自身がアンケートを通して自らが有しているジェンダーバイアスに「気づき」、男性被害者という現代社会における究極のマイノリティという立場だからこそできることがあるという、社会的課題に対する「気づき」を得られたのではないだろうか。

私たちも、今回の男性被害者へのアンケート調査を通して、女性被害者支援についても原点回帰の機会を得られたと共に、新たな課題や取り組むべきテーマについて考えることができ、支援団体として非常に貴重な機会になったことに感謝申し上げます。

今事業による調査・検証結果が、徳島県における男性DV被害者施策や民間団体支援の拡充・前進への一助となることを願っている。